

意思決定支援

意思決定支援とは・・・患者やその家族が医療・ケアチームと話し合いを行い、最善の医療・ケアを決定するプロセス緩和医療における意思決定支援は、患者やその家族が医療・ケアチームと話し合いを行い、最善の医療・ケアを決定するプロセスを指します。このプロセスは、患者の意思を尊重し、患者の価値観や人生観を考慮に入れ、医療・ケアの開始、変更、中止などの決定を行うことが含まれます。

患者の意向と医療者が「良いと思う選択」が異なる時

毎年地域の医療機関・介護保険機関の皆さんに参加いただき、様々なテーマで研修や意見交換を行う「オープンカンファレンス」を当院の緩和ケア病棟主催で行っています。今年は2月4日に約50名のご参加をいただき、「**がん治療中で疼痛コントロールがオピオイド（麻薬性疼痛薬）により安定している患者が、症状が緩和するたびに患者の意向でオピオイド中止を繰り返し求めた場面において、医療者としてどのように関わるべきか**」というテーマ、言い換えれば医療的立場で「痛み」に対してその患者さんにベストだと思う治療が受け入れられないケースでの、医師や臨床宗教家のパネリストの先生方にご意見を伺った後グループにわかれて意見交換会を行いました。



グループワークでは様々な意見が

9つのグループに分かれて、意見交換を行いました。

グループには医師、訪問看護・急性期医療・緩和医療など様々な分野に携わる看護師・薬剤師・リハビリ療法士・心理士・ケアマネジャー・介護士のみなさんがバラバラに別れ、それぞれの立場からの意見を活発に発言されました。

全体を通して共通して挙げられたのは、単に医学的妥当性を説明するだけでは不十分であり、患者がオピオイドに対して抱いている思いや価値観、信念を丁寧に聴き取る必要性。依存への不安、薬への抵抗感、「できるだけ使いたくない」という本人なりの覚悟や人生観が背景にある場合も多く、それらを理解せずに継続や中止を判断することは、患者の納得感を損なう可能性があるという認識が共有されました。

また、症状が一時的に緩和した段階で中止を求められることに対しては、「中止か継続か」の二者択一ではなく、患者の胸に落ちない点を整理し、医療者間・患者間の橋渡しを行う役割が重要であるとの意見が出されました。患者の言葉にならない不安や迷いに寄り添いながら、今後起こり得る症状の変化や、再開の選択肢を含めた柔軟な説明を行うことが、信頼関係の維持につながると考えられました。

さらに、入院前や早期の関わりにおいては、直接的な医療介入が難しい場面であっても、「今、何ができるか」を患者に問いかけ、話してもらうこと自体が重要な支援になるという意見も共有。対話を重ねることで患者の思いが可視化され、その後の意思決定支援や疼痛コントロールの方針決定に生かされることが確認されました。

総じて今回のグループワークを通じて、オピオイド使用に関する意思決定支援では、医学的根拠に基づいた説明と同時に、患者の意向や信念、精神的背景に寄り添う姿勢が不可欠であることが再確認され、多職種が連携し、患者の納得感を大切にしながら柔軟に関わっていくことが、がん患者の疼痛緩和とQOLの維持につながると考えられました。

今回のケースでは、患者さんの思いを受け止めながら、どうしたらいいかと悩んだスタッフも多かったのですが、このオープンカンファレンスを通して、様々な立場のご意見や考えを聞き整理することで地域の連携も深まり、また共通の認識で情報共有より、今後出会う患者さんに、ご家族を含めて、それぞれの立場の意見を尊重しながらよりよい治療やケアを提供していけるのではないかと、期待と希望と元気をいただいた会になったと思いました。

